國學院大學学術情報リポジトリ

大井川流域における文法形式の変化：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 木川, 行央, Kigawa, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000431

大井川流域における文法形式の変化

木川行央

１．はじめに

言語地図は、ある地域における言語形式の分布状況を示すとともに、その地域においてどのような経緯を経て地図の示すような分布状況になったかを推測する手段となる。さらにその後の変化の方向を考える一つの手立てともなる。しかし、一時点での分布状況からの推測が、必ずしも実際の変化と一致するとは限らない。

ある地域において一定の時間が経過した後の分布状況を検証する研究は近年になって行われるようになってきた（大西編2016、大西編2017他）。本稿で取り上げる大井川流域についても木川2017や太田2017がある。これらは、同じ調査の結果をまとめたものであるが、語彙を中心に報告した。そこで本稿では、同じ調査の結果のうち、文法項目の形容詞と打ち消し表現にそれぞれ関連する項目に絞って、どのような変化があったかを見ていきたい。

２．地域の概要

本稿で対象とする地域の概要について、木川2017で示したところをまとめると以下のようになる。なお、対象とする地域を図１に示す。この図を含め、市町村名は平成の大合併以前の名称を用いる。

大井川は赤石山脈間ノ岳に端を発し、駿河湾に注ぐ全長160㎞の川である。中・上流は険しい渓谷で、下流は扇状地性の平野となっている。

行政区分としては、上流の右岸と左岸にまたがる井川は全域駿河国であるが、その南の地域は大井川が駿河国と遠江国の境界となっていた。明治以降も、井川は東の安倍川流域と同じ安倍郡となったが、それ以外は大井川の左岸が志太郡、右岸が榛原郡と川が郡境であった。その後、中・上流の村々は右岸の村と左岸の村が合併し大井川の両岸にまたがる町となり、下流の島田市は1961年に榛原郡初倉村を編入し大井川の両岸にまたがる市となった。さらに平成の大合併では、

2005年本川根町と中川根町が本川根町となり、同年金谷町が島田市と合併、2008年には川根町が島田市に編入される。また、2008年最下流の大井川町は焼津市に、2009年岡部町は藤枝市に編入された。

次に、この地域の交通の歴史について、浅井（1967）・野本（1979）等によってたどる。まず、下流域には東西に走る東海道があるが、江戸時代大井川は、架橋・通船が禁じられていた。大井川に橋が架けられるのは明治になってからである。ただし井川には刎橋があった。また、下流域の村人は盥船の使用が黙認され、また浅瀬の時には徒歩で渡ることもあったようである。

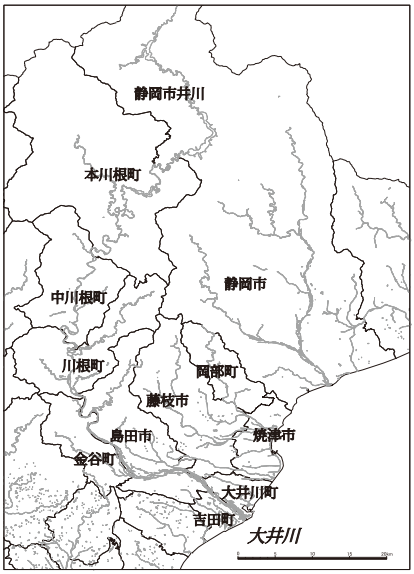

図１　調査地域

大井川の上流域と下流域すなわち南北を結ぶ経路は、江戸時代は通船が禁じられていたこと、川の流れが急で蛇行していることもあり、船は用いられなかった。また川沿いの道路も長く整備されなかったので、中・上流域から他の地域に向かう場合、下流に向かうのではなく、峠越えによって、静岡・藤枝・森町へ出るというルートが多く利用されていた。

下流域と上流域を結ぶ交通手段としては、1871年に高瀬舟が就航するが、井川と本川根町の間の接岨峡を越えることはできず、井川と下流域を直接結ぶことはできなかった。その後、1931年に、金谷から本川根町千頭にいたる大井川鉄道が全通する。しかし、鉄道でさらに上流域にまで行けるようになったのは、井川ダム建設のために作られた大井川鉄道井川線が開通してからである。一方、下流と中・上流域を結ぶ道路も次第に整備されていく。このように陸上交通が整備されていく中で、船は次第に用いられなくなっていった。また、井川から静岡市の玉川地区を経て安倍川沿いに旧市内に向かう道路、本川根町千頭から富士城峠を経て静岡市の清沢地区から旧市内へ抜ける道路や、川根町笹間から清笹峠・清沢地区を経て旧市内へ向かう道路、また西に向かっては、川根町家山から周智郡森町に至る道路など昔の峠越えのルートも整備され、東西を結ぶ交通路も利用されている。特に井川は、現在も峠を越えて静岡市中心部に出るのが一般的である。

３．調査について

本稿で示す言語地図は以下の調査結果によるものである。

まず、1974年から1976年にかけて、静岡大学方言研究会が行ったその当時の静岡市全域すなわち、安倍川流域と大井川最上流の井川における言語地理学的調査と、1977年から1983年にかけ、同研究会が井川を除く大井川流域で行った言語地理学的調査である（以下この二つの調査をまとめて1974-1983年調査と呼ぶ）。大井川流域の調査は、安倍川流域の調査で使用した調査票に語彙項目などを追加した調査票を使用しているので、井川については、他の大井川流域で実施した調査項目の結果がない場合がある。

最近の状況の調査は、2012年から2015年にかけて井川を含む、大井川の上流から河口地域までで行った言語地理学的調査である。（これを以下2012-2015年調査と呼ぶ）。この調査は基本的に、1977-1983年調査の地点を調査することを試みたが、協力者が見つからないなどのため、調査地点数は、1974-1983年調査よりも少ない（詳細は太田2017参照）。調査票は井川を除く大井川流域の調査で使用した調査票を一部修正して使用した。

４．形容詞の過去表現・推量表現

最初に、形容詞の過去表現「面白かった」と推量表現「涼しいだろう」の結果を見る。ちなみに、それぞれ、「昨日見た映画はどうでしたか」と聞かれて「とても面白かった」という場合、「この分だと夕方は涼しいだろう」という場合の表現を聞いている。

形容詞の過去表現「面白かった」の結果（1974-1983年調査の結果は図２、2012-2015年調査の結果は図３）をみると、1974-1983年当時は、形容詞の終止連体形オモシロイに過去を表す形式ケ（藤枝市・焼津市・岡部町など東南部の地域にはキの地点もある）が接続したオモシロイッケが、上流域から下流域まで広く用いられている[(1)]。それに加えて、下流の扇状地の北部から上流域にかけて、カリ活用系の形にケが後接したオモシロカッケが広く分布している。下流域での分布も若干見られるところからすると、オモシロカッケは全域で用いられていた可能性が高い。2012-2015年調査になると、オモシロカッケがほぼ上流域のみの分布になり、かつ地点数も少なくなっている。そのかわりに用いられているのは、共通語形のオモシロカッタではなく上述のオモシロイッケである。この表現は現在の若年層にも広く用いられており、共通語化とは異なる形へ統合しつつあると言えよう。ちなみにオモシロイッキは1974-1983年調査より2012-2015年調査の方が増加しているが、他の資料から見ても、1974-1983年当時から最近になって急

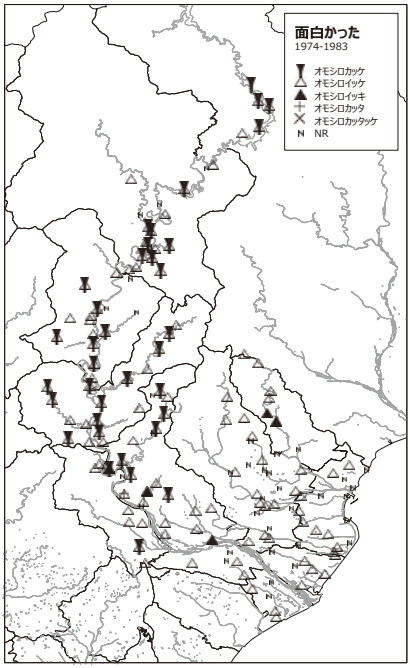

図２　面白かった1974-1983年調査

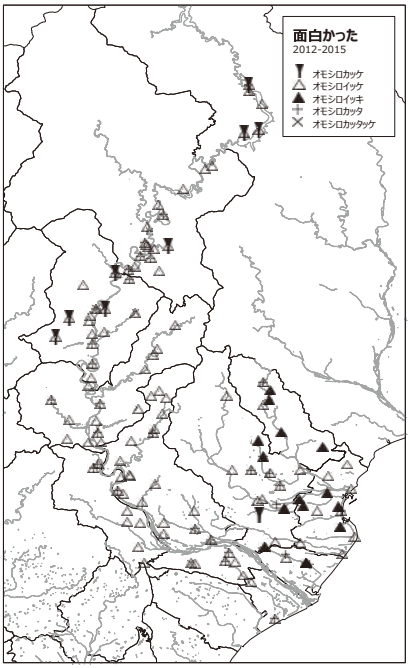

図３　面白かった2012-2015年調査

激に増加したということは考えにくく、調査の時点での確認が不足していたことによるものと思われる。なお、共通語形オモシロカッタとともにオモシロカッタッケがあるが、この方言においてはケがタに後接しても、回想などの意味合いは含まれない。この表現も、確認された地点は少ないが広く分布していると考えてよかろう。

次に、形容詞の推量表現「涼しいだろう」を見てみよう（1974-1983年調査の結果は図４、2012-2015年調査の結果は図５）。この地域で推量を表す形式としては、ラ・ズラがある。この２形の違いについてはここでは触れないが、この両形が上流から下流まで全域に分布している[(2)]。また下流域に、多くはないがスズシーダラがある。これは木川2017でも触れた、ズラにかわって増加しつつある形式である。

これ以外に見られるのが、スズシカンナ、スズシカラズとスズシーダラズ、また「涼しそう」に当たると考えられるスズシカリソーである。中條編1982によれば、スズシカンナのナは、形容詞および形容詞型の助動詞にのみ接続し、現在・未来の推量を表し、確認・念押しの用法をもたない形式である。また、スズシカ

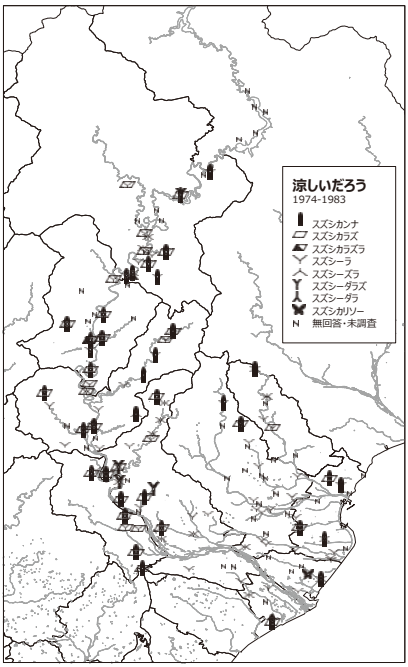

図４　涼しいだろう1974-1983年調査

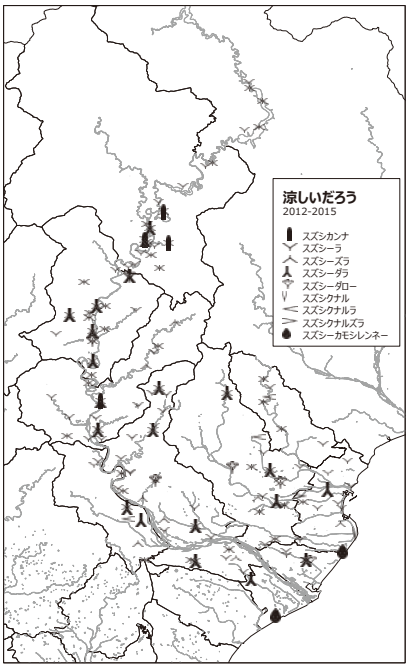

図５　涼しいだろう2012-2015年調査

ラズ・スズシーダラズのズも推量を表わし、動詞にも用いられるが自分の意志的な動作についての推量には用いられない。また、形容詞に接続する場合、現在の事態の推量には使いにくいという点が推量のラと異なる。そして、先のナとこのズの違いは明確にできないとしている。さてこれらのうち、スズシーダラズ以外はカリ活用系の形に推量を表す形式ナ・ズが接続した形である。ちなみに、スズシーダラズのダラは助動詞ダの活用形であり（中條編1982）、上にあげたスズシーダラと直接関係するものではないと考えられる。

2012-2015年調査の結果を見ると、スズシーラ・スズシーズラが全域に分布しているのは同じであるが、スズシーダラが増加している。そして、1974-1983年調査の結果と比較してもっとも異なるのは、推量をナで表す表現、すなわちスズシカンナが減少し、さらに推量をズで表す表現、スズシカラズは回答された地点がなくなっているという点である。すなわち、スズシカリソーも含め、カリ活用系の形を用いた表現が極端に減少しているということである。これは先に述べたオモシロカッケが減少していることと並行的である。

５．打ち消し表現

大井川流域は、西日本で打ち消しを表す形式として広く分布するンと東日本に分布するナイが接触する地域である。ただし、大井川自体が境界線となるのではなく、ンは大井川の東の地域にも分布する。さらに、大井川上流地域には、万葉集の東歌に見られる「なふ」との関連が考えられるノーが分布している。これらの形式の分布及び1974-1983年調査と2012-2015年調査の比較は、木川2017で示した。そこでは、この間にンとナイ・ノーの分布域は基本的に変わっていないが、2012-2015年調査では、ンやノーとの併用という形でナイの使用の増加が見られる。特に1974-1983年調査では、ンが多かった中川根町においてこれが目立つ。この増加は下流や静岡市内からの伝播とも考えられるが、共通語化とも考えられるとした。

さて、本稿では、打ち消し過去と打ち消し推量、さらに意志・勧誘の表現を見る。

まず､打ち消し過去｢行かなかった｣（調査文は｢私は昨日仕事に行かなかった｣）を取り上げる（1974-1983年調査の結果が図６、2012-2015年調査の結果が図７）。1974-1983年調査の結果を見ると、先の打ち消しの分布と同様、中・下流域には大井川左岸を中心にナイに過去を表すケの接続したイカナイッケ（この地域の東南部で過去を表す形式がキとなるイカナイッキが多くなるのは、「面白かった」の図と同じである）、右岸を中心にンにケの接続したイカンケ、井川をはじめ上流域には打ち消しのノーに過去を表すケの接続したイカノーッケが分布する。なお、図６では図の煩雑さを避けるためイカノーッケを除いた。

これ以外に分布する形式としては共通語形であるイカナカッタがあるが、単独で使用するという地点はない。またイカナカッタッケは、先のオモシロカッタッケ同様、詠嘆などの意味は含まない。イカンカッタは、イカナカッタからの類推から生じた形式と考えられ、打ち消しがンの地域では広く用いられるようになった形である。さらにイカナカッケは、「面白かった」がオモシロカッケとなるのと同じく形容詞型助動詞ナイのカリ活用系の形にケが接続した形である。

これらに加えてイカナンダが、地点数は多いとは言えないが、下流域から上流域にまで分布している。ナンダは国立国語研究所1999によれば、富山・長野・山梨および静岡中部を東の境とし、西は四国・中国地方にまで分布する表現である。九州は打ち消しはンであるがナンダは使わない、中国地方も西部はナンダをあまり用いないなど打ち消しのンの分布と全く一致するというわけではないが、重なる部分が大きい。江戸の文献や歌舞伎などにも見られるが、基本的には西日本方言的な形式であると言えよう。

これが2012-2014年調査になると、まずイカナカッケとイカナンダがなくなる。

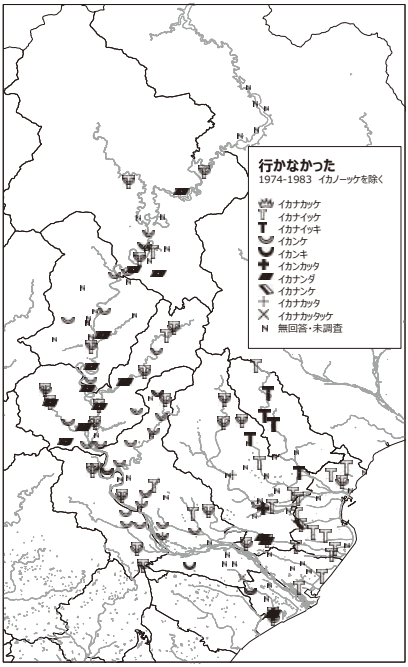

図６　行かなかった1974-1983年調査

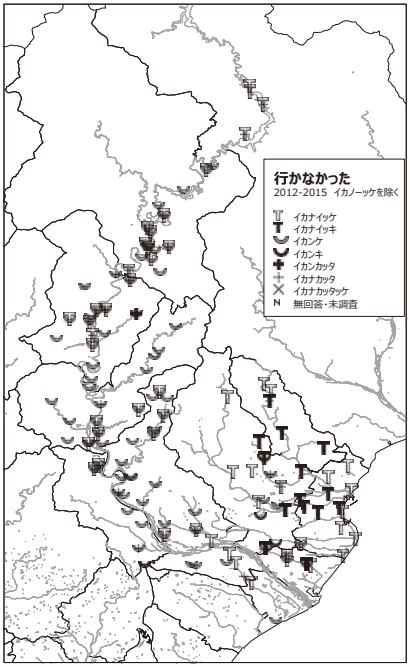

図７　行かなかった2012-2015年調査

イカナカッケがなくなるのは、オモシロカッケが少なくなるのと並行している[(3)]。また、イカナンダがなくなるのは、他地域でも広く見られるが、打ち消しと過去両方の意味を併せ持つ形式から、打ち消しを表す形式と過去を表す形式の接続した形へという変化、すなわち分析的な表現への変化とみることができる。

次に打ち消し推量「降らないだろう」についてみる。調査文は「もう雨は降らないだろう」である。1974-1983年調査の結果が図８、2012-2014年調査の結果が図９であるが、1974-1983年調査の結果は資料の散逸などにより確認できる地点が少ない。さて、この表現の場合、打ち消しと推量の連続であるためそれぞれの意味で用いられる形式の組み合わせのバリエーションとなることが多い。すなわち、打ち消しがノーであるか、ナイであるか、ンであるか、推量がラであるかズラであるかそれ以外であるか、それぞれの組み合わせが考えられる。このうち、ラとズラについてはやはり上流から下流まで広く分布している。また打ち消しを表す形式についても、基本的にこれまでに出てきた分布と一致する。ただし、ノーについては、これを使用する地域の資料が少ないので、この用法と他の用法の違いによる違いについては触れられない。しかし、2012-2014年調査の結果から推

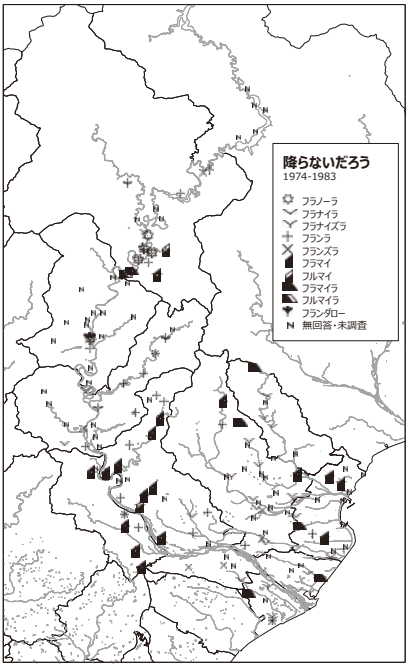

図８　降らないだろう1974-1983年調査

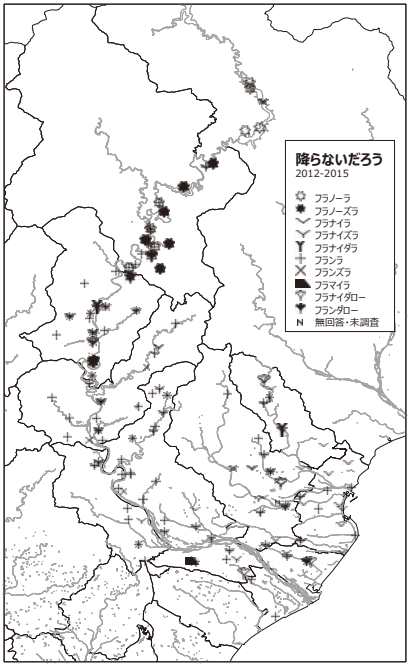

図９　降らないだろう2012-2014年調査

測すると、この用法でもノーが多くの地点で使われていたと考えられる[(4)]。

この項目で注意すべき点は、形式が打ち消しと推量の意味を併せ持ったマイが上流域から下流域まで用いられ、さらにそれが動詞のア段に接続するフラマイとウ段に接続するフルマイの二つの形がある点である。フラマイとフルマイは、数の点ではフラマイが多く、上流域から下流域にまで分布し、フルマイは比較的上流に点在する。なお、マイにラが後接するフラマイラ・フルナイラも見られるが、これについては後述する。

2012-2014年調査の結果を見ると、打ち消しと推量の組み合わせによる表現については、基本的にあまり変化は見られないと言って良いだろう。前述のように1974-1983年調査の資料では確認できなかった打ち消しにノーを用いる表現も井川・本川根に多く現れている。地図を比較したとき最も異なるのは、マイがほとんど見られなくなっていることである。山口2003にも指摘があるように、「まい」は、東京語などでは「明治大正期頃を境に、打ち消しと推量とに別語を併用する『ないだろう』などの言い方との交替もめだちはじめ、次第に弱体化する」（山口2003;147）ようになる。大井川流域においても、やはり打ち消しと推量の形式の

接続した形がもっぱら用いられるようになっている。このマイの減少は、当地域においては1974-1983年から2012-2014年の間で急速に進行したと考えられる。この状況の中で１地点ではあるが残っているのがフラマイラの形である。これはマイの後に推量を表すラが接続したものと考えられる。上述のように、1974-1983年調査でも、マイにラの後接する形が数地点見られた。この形は、おそらく打ち消しと推量それぞれに別形式を当てる、すなわち分析的表現へと変化する段階で、一足飛びに変化するのではなく、マイが単に打ち消しの意味のみを担い、推量はラが表すという段階を経た、あるいはそのように解釈する地点なり話し手がいたことを推測させる。

マイを用いる表現としては、打ち消し推量の他に、勧誘表現がある。ここでは、「行こう」（調査文は「一緒に町へ買い物に行こう」）の結果を示す。この地域における勧誘の表現としては、イカザーやイカズがある。これらの形式については、男女差があるか、あるいはイカザーやイカズを意志でも使うかなどが地点により異なるが、全域で用いられる。この他にもイカッカや打ち消しを表す形式に疑問を表す形式が後接したイカナイカなどさまざまな表現があり、同じ地点で複数の形式を用いることが多い。そのため図が複雑になるので、マイの回答があった地点のみを示す（1974-1983年調査の結果が図10、2012-2015年調査の結果が図11）。これを見ると、まず1974-1983年調査から2012-2015年調査の間で、マイの使用が急激に減少していることが分かる。これは先の、打ち消し推量でマイが減少するのと並行する動きである。

マイに前接する形を見ると、打ち消し推量と同じく、前接する形がア段のイカマイの他に、ウ段のイクマイがあり、さらに打ち消し推量では見られなかったイ段のイキマイが見られる。それぞれの分布域は、イカマイが上流域から下流域まで、イキマイは左岸の下流域を中心に上流域にまで、イクマイは東南部のみである。したがって、ウ段接続は、打ち消し推量と勧誘で分布域が異なることになる。さらに図８と図10を比較すると、どちらもア段形接続である地点が多いが、打ち消し推量と勧誘で接続形が異なる地点がある。例えば、打ち消し推量でウ段接続する５地点のうち、勧誘は１地点は不明であるが、３地点がイカマイ、１地点がイキマイである。また、勧誘がイキマイの９地点のうち、打ち消し推量の「降らないだろう」がフラマイなのは１地点フルマイが１地点で、他の地点は５地点がナイ・ンにラが接続した形、２地点が不明、勧誘がイクマイの４地点のうち、打ち消し推量は３地点がフラマイないしフラマイラ、１地点がフランラであった。すなわち、勧誘がイ段接続の地点、ウ段接続の地点で勧誘の表現と打ち消し推量が同じ段の形に接続する地点は、確認できる範囲ではない、ということである。さて、ア段接続・イ段接続・ウ段接続の分布を、国立国語研究所2002の第235図の「行こうよ」および第234図「（決して）行くまい」の図によって見ると、まずイ段接続は、「行くまい」の図で中国・四国・九州に若干見られるが、それ以外

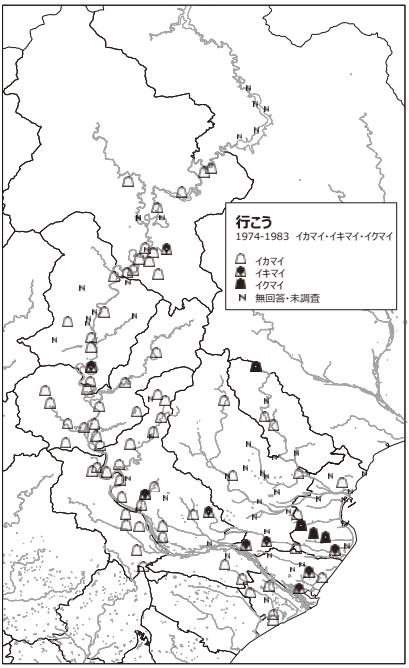

図10　行こう1974-1983年調査

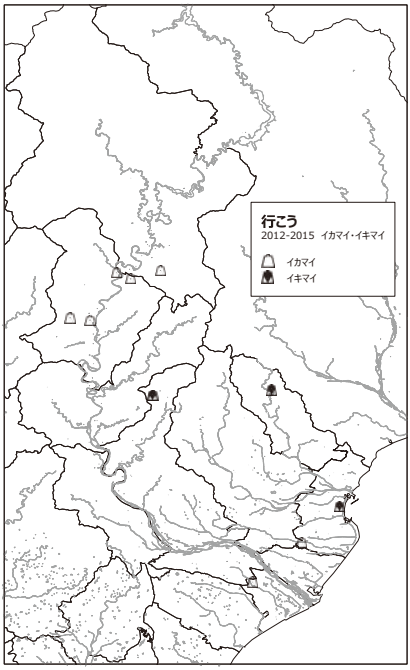

図11　行こう2012-2015年調査

にはない。ア段接続は「行くまい」では西日本に点在するが、地点数の多いのは愛知県から静岡県西部、「行こう」でも長野・愛知・静岡県西部に分布している。ウ段接続は「行くまい」の図では全国に広く分布するが、「行こう」の図では富山・新潟・愛知・長野・静岡に点在する。さらに静岡県内の状況を静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編1987の「助詞・助動詞−15もう雨は降らないだろう」と「助詞・助動詞−19一緒に町へ行こうよ」でみると、「降らないだろう」ではやはり静岡県西部にフラマイ、東部にはフルマイが分布し、「行こう」では県西部にはやりフラマイが分布するが、東部にはマイを用いた形はほとんど用いられず、フルマイはフラマイの分布する地域の東の数地点で用いられている。

このような分布状況から、この地域では、もともとはいずれの用法でもア段接続が広く用いられていたが、ウ段接続が東の地域からの伝播あるいは共通語の影響で使用する地域が現れたと考えられる。その際、ア段接続とウ段接続を用法によって区別することで両形の併存がはかられたのであろう。イ段接続については、どのような経緯で使用されるようになったかを明確することは出来ないが、ア段接続とは異なる用法で棲み分けるようになったと考えられる。今後、さらに、他

の意味用法を含め総合的に考えていく必要があろう。

6．まとめ

以上、大井川流域における30～40年間の文法形式の変化について地理的分布とともに見てきた。打ち消しを表す形式ン・ナイ・ノーや推量を表す形式ラ・ズラなどの分布は、二つの調査の間で大きく変化したとは言えないが、その他の形式は極端に減少したり、使われなくなったりするなどの変化が見られた。その変化には、次の二つの大きな傾向を見ることができる。

一つは、分析的表現に変化しているという点である。本稿で取り上げた表現でいうと、ナンダが打ち消しを表す形式に過去を表す形式が後接する形に、マイが打ち消しを表す形式に推量を表す形式が後接する形になるという変化がこれにあたる。ナンダやマイが、使用されなくなり分析的表現になるという点では、共通語などと同じ方向への変化といえるが、その結果として用いられるようになった形が必ずしも共通語形とは限らないので、単純な共通語化とは言えない。木川2017に示したズラからダラへの変化も分析的表現への変化の一つといえる。

もう一点は、表現の単純化である。単純化の一つの現れは、推量を表す形式のナやズが用いられなくなるなど、似た意味の形式の数が減ったことである。また、活用の単純化も見られる。形容詞および形容詞型の助動詞の場合、過去のオモシロカッケやナカッケ、推量のスズシカンナ・スズシカラズなどで見られた、カリ活用系の形が用いられなくなり、過去であればケ、推量であればラ・ズラが終止連体形に接続する表現が主となりつつある。大西編2016でも確認できるように、タカクのような連用形はあるので、形容詞が無活用化したという訳ではないが、少なくとも方言では、活用が単純になってきていると言うことはいえよう。あまり触れられなかったが、助動詞ダの活用形ダラが用いられなくなってきているのも類似の変化である。

太田2017、木川2017で主に取り上げた語彙は共通語化が進んでいたが、本稿で取り上げた文法項目は、広い意味では共通語化の面もあるが、そして伝統的な方言形が用いられなくなってきてはいるが、共通語そのものではない形への変化もみられる。その他の項目や若い世代の状況など加え考察していく必要があろう。

注

（1）オモシロイッケの後にヨやナー・ヤーなどの終助詞がつく形での回答も多いが、ここではこれらをまとめて示す。また、-oiの融合したものもまとめてある。以下本稿では、終助詞などの後接する表現や母音連続の融合したものはまとめて扱う。

（2）最上流の井川については、資料散逸のため結果が確認できない。地図ではNで示してある地点はこれによる場合が多い。以下の地図でも同様。

（3）オモシロカッケが全く用いられなくなったわけではないことを考えると、イカナカッケを

用いる地点があることも考えられる。

（4）イカノーッケは、1974-1983年調査と2012-2015年調査でほとんど違いがない。井川については1974-1983年調査の資料がないが、本川根町全域に分布し、2012-2015年調査でも井川と本川根町の多くの地点で用いられている。ただし、木川2006でも述べたように、2004年に本川根町小長井で1910年生まれから1990年生まれまでの68名に対して実施した調査では、「起きない」をオキノーというとしたのは1947年生まれまでであり、さらに「行かなかった」をイカノーッケというとしたのは1937年生まれまでであった。用法によって違いが見られたわけである。

参考文献

浅井治平　1967『大井川とその周辺』いずみ出版
太田有多子　2017「大井川流域の言語」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』,205-231
大西拓一郎編　2016『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』　朝倉書店
大西拓一郎編　2017『空間と時間の中の方言』朝倉書店
木川行央　2006『平成15年度～平成17年度　科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』
木川行央　2017「大井川流域における言語変化－30年前の調査結果との比較から－」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』朝倉書店,176-204
国立国語研究所　1999『方言文法全国地図　第４集表現法編１』国立国語研究所
国立国語研究所　2002『方言文法全国地図　第５集表現法２』国立国語研究所
静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編　1987『図説静岡県方言辞典』吉見書店
中條修編　1982『静岡方言の研究』吉見書店
野本寛一　1979『大井川―その風土と文化―』静岡新聞社
山口暁二　2003『助動詞史を探る』和泉書院

本研究はJSPS科研費 JP23242024、JP16K02734の助成を受けたものである。